
山形県村山地方の紙本絵馬に対する応急処置

First aid about votive tablets “Ema” painted on paper
in Yamagata prefecture Murayama region.

大山 龍顕 | Tatsuaki Oyama

Conservation environment of Ema is susceptible such as temperatures and humidities.

Those in Yamagata prefecture Murayama region painted on paper are located in situations that often are damaged.

In particular, degradation of the paper drawn on acid paper after Meiji period were severe conditions.

So, until now also have reported the importance of first aid for the preservation of the Ema.

But, it was not detail reports about treatments.

So It is assumed that since it is important for first aids, actually report parts of the treatments.

1. はじめに

多くの地域には様々な絵馬がある。絵馬は古くは神社に馬を奉納したことに発し、その後様々に変化してきた¹。山形県村山地方にも様々な絵馬が奉納されている。東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターでは私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(平成22~26年度)「複合的保存修復活動による地域文化遺産の保存と地域文化力向上システムの研究」の一環として対象地域を中心として悉皆的な文化遺産調査から保存へとつなげる取り組みを行っており、東洋絵画修復室でも書画調査に加えて絵馬調査を進めてきた。

絵馬の奉納されている環境はもともと外気の影響を受けやすく、過酷な保存環境にある。そのため、地域に所在する絵馬には何らかの損傷があることが多い。美術的、民俗的価値評価が定まっていないことも多く、また、同一の主題が集まって奉納されることも多い。総数が多いこともあり、保存修復の対象にはなり難い。一方で、明治以降に制作された紙本の絵馬では、近世以前の絵馬にはなかった酸性紙問題により損傷が著しく進む傾向がある²。

地域文化遺産として絵馬の保存修復には様々な課題がある上に、作品評価が定まる以前に損傷が進むことで価値を落とすといった負の連鎖に陥ることもある。

そこで、平成22年度より絵馬調査とともに、応急処置を行い、地域に所在する絵馬の保存に取り組んできた。その概要については、大学紀要第21号³や年報⁴などにおいて報告してきた。しかし、概要だけでは実際の処置方法については記しきれないものも多い。そのため、本稿では、これまで実施した調査時の保存環境の改善と共に、損傷部の応

急処置方法について、より詳細に記して、絵馬の保存上の課題について考察することとした。

2. 研究対象地域と課題

(1) 対象地域

- 西川町 ・旧本道寺(口の宮湯殿山神社)、
向本道寺(稲荷神社)、八聖山金山神社、
岩根沢三山神社(旧日月寺)、岩根沢宿坊、
愛染院、獅子ヶ口諏訪神社
- 大江町 ・中の畑雷神社、羽黒神社、巨海院、法界寺
- 高島町 ・大聖寺(亀岡文殊)
- 近隣地域・久昌寺(上山)、慈恩寺(寒河江)

これまでの研究事業において調査を実施した箇所は主に上記のとおりである。調査場所が寺社に限られたこともあり、何らかの絵馬が奉納されていた。対象地域の絵馬の特徴としては、湯殿山や月山への山岳信仰の繁栄を背景とした幅2mを超える大型の参詣絵馬が奉納されている西川町の旧本道寺に対して、東北最大級の寺院である寒河江慈恩寺にも大型絵馬が奉納されているものの、近世から近代にかけて馬曳図や合戦図が見られ、大型絵馬でも旧本道寺とは画題が異なっていた。一方で、獅子ヶ口諏訪神社では小堂に「獅子頭」を題材にした100点近くの小中型絵馬が奉納されている。

大江町の山村部には地元で描かれた水神である龍の絵馬が小堂内に奉納されており、上市市久昌寺では村山地方に特有といわれる「ムカサリ絵馬」が多く奉納されていた。

絵馬の一点ずつに作品としての巧拙が見られるものの、各所の信仰により、画題や傾向が共通することも多い。そのため、絵馬が構成する空間自体が信仰や地域の特色となっていることが確認された。

また西川町の稲荷神社(向本道寺)、愛染院の天井画、獅子ヶ口諏訪神社の絵馬や天井画、大江町羽黒神社の天井画に、多数の同一作者名が確認されたことも興味深い。その中には、銘と共に十代の記述があるものもあり、絵



[図1] 損傷した絵馬



[図2] 調査前の保管状況1



[図3] 調査前の保管状況2

画習得の場ともなっていた様子を見ることができる。また、絵馬には年号や作者銘の記載も比較的多く、奉納場所が移動することも掛軸などに比べ少ない。そのため、地域の絵画史を知る資料として、さらに多くの関係性を見出す余地があり、地域で活動していた絵師の実態や関係性を探る上でも貴重な資料となることを示している。

絵師の活動としては限られた範囲内の事で、地域史の一端としてみると些細な出来事ではある。しかし、中央画壇との交流や師事した絵師の地域での具体的な活動を示すものも見られた。寒河江慈恩寺や高島亀岡文殊といった地域の古拙では中央画壇との関係を示す作例もみられ、美術史的にも評価されている郷土貞繁など、武人画家として知られた例もある。

研究事業内で実施した奉納品調査では、獅子頭奉納が行われている獅子ヶ口諏訪神社において、絵馬、獅子頭、天井絵と落書き調査を行ったことから、地域間の文化交流や地域の信仰の一端が明らかとなり、新たな地域史研究に豊かな題材を提供しているものとなっている。

(2) 保存上の課題

絵馬が本来、奉納品であることを考えると、他の作品同様に保存されるべきかという議論もあるものの、保存修復の視点からは維持継承する対象として問題点は多い。課題は先述したとおり多くの場合、損傷していることである。場合によっては、お炊き上げにより供養されることもあるが、画面が傷んでいなくとも長押などに傾いて掛けられていることで、裏面に塵埃が堆積し損傷する傾向は共通する。

数多くの絵馬が奉納されている寺社では、古い絵馬や傷んだ絵馬は取り外され保管されることもあるが、中には奉納されている堂内の隅に傷んだ絵馬が重なっていることもある。[図1]

絵馬保存の難しいことは、傷んだ絵馬をどう扱うことが大切になることなのか、判断が難しい点にあるともいえる。掛けておくことも大切にするのなら、傷んだ絵馬を掛けておかないことも大切に行っている場合がある。「保存修復の視点からは維持継承する対象として考える」と述べたが、損傷していない絵馬の場合に保存しようとする人が多いようであり、地域文化遺産としての絵馬保存を考えると、今回の取り組みは状態を改善することで、絵馬を保存するかどうかという選択肢が増えることを目標としているといえる。



[図4] 改善した保管状況1



[図5] 改善した保管状況2

3. 調査時の保存環境の改善

(1) 獅子ヶ口諏訪神社(西川町)⁵⁻⁶⁻⁷

西川町にある獅子ヶ口諏訪神社は膨大な獅子頭や絵馬などが奉納されていることで知られている。現在でも篤い信仰を集めており、宮司らによって丁寧に維持管理がなされている。

絵馬については、拜殿の長押上にぐりと配置されている絵馬だけでなく、本殿内部にはわずかに数畳の広さにも関わらず、数十点の絵馬が重ねられていた。本殿は聖域でも

あり、頻繁な手入れは難しいともみえ、絵馬には損傷しているものも多かった。季節的な影響か定かではないものの、調査時期は11月に入っており、越冬のためか、絵馬表面に多数のカメムシが確認された。

そこで、調査時には表面に付着した塵埃を刷毛で払い、付着していたカメムシの除去も行った。一点一点確認すると、保管場所は新聞紙などが敷かれ、比較的丁寧に保管場所を確保してあったものの、建材の隙間から虫が侵入し易い状況であることは明らかだった。そこで、持参していた簀子とアーカイバルボードと養生テープを用いて、保管場所を作成し、保管スペースの改善を行った[図2、3、4、5]。

(2) 実施処置

絵馬の虫害の進行については紀要第21号においても確認したが、獅子ヶ口諏訪神社の絵馬に確認された状況として、先述したカメムシによる損傷の進行が上げられる。画面に確認された夥しいカメムシは損傷部から内部に侵入することが確認された。わずかな穴から侵入して、移動する際に本紙を傷つける。紙を食べる虫の害などが軽微でも、カ



[図6] 損傷が著しい絵馬



[図7] 穴を塞いだ絵馬

メムシなどが侵入することによる損傷についても注意が必要なため、損傷部を塞いでおくことが重要である[図6、7]。

(3) 裏面の清掃

絵馬の状態調査に合わせて、裏面の清掃等を行った。裏面の清掃については紀要第21号において報告した。

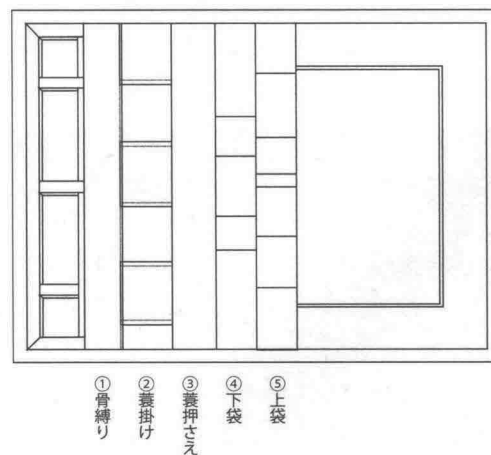
4. 応急処置

(1) 絵馬の構造

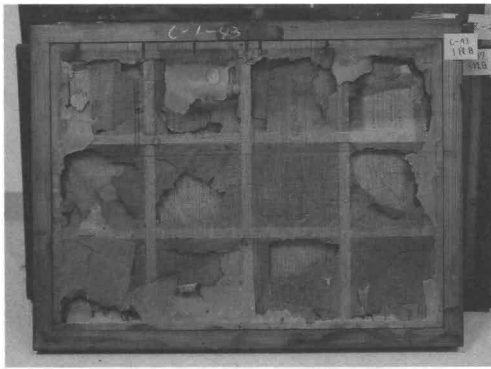
絵馬には板に直接彩色をしたものから、板に古銭を留めたものまで多様な事例が確認される。今回着目する紙本の絵馬にも、板に紙を貼り、描いたものや、組子の木枠に和紙を貼り支持体として本紙を貼り込んだ構造がみられる。

組子の木枠に下張りをすることは、屏風や襖に見られる構造と基本的には変わらない。組子に和紙全体に糊を塗布して貼りつけべた張りをする「骨縛り」、蓑のような重層構造に和紙を張る「蓑掛け」、蓑掛け全体を抑えるように全体に和紙をべた張りする「蓑押さえ」、緩衝剤ともなる「下袋」「上袋」と和紙の層が出来上がる。

この重層構造に張り込んだ和紙の下張りの上に肌裏紙、増裏紙と裏打ちを行った本紙を貼り込む。更に、裏面にも同様の下張りを行い、裏面には紺紙などを貼り仕立てる[図8]。



[図8] 額装の構造



【図9】 損傷した裏面

しかし、地域に所在する絵馬では全てがそこまでの重層構造とはなっていない。途中の下張りが省かれていることも多くみられる。使用される紙も明治時代以降は新聞紙が使用される頻度は高い。近世以前の下張りでは、反故紙が用いられることも多く、近年では資料的価値が見直され、丁寧に解体され歴史資料とされることもある。

明治以降の本紙については酸性紙が原因で損傷が進むことを先述したが、下張りも同様である。新聞紙が用いられている絵馬では、下張りの劣化が著しく、茶褐色に劣化し、粉砕するように劣化している事例も多く見られる【図9】。

(2) 損傷部への処置

村山地域独特の絵馬に、亡くなったわが子を絵の中だけでも結婚させたいと願い、婚礼(ムカサリ)図として描いた「ムカサリ絵馬」と呼ばれる絵馬がある。東北地方に特有の風習であるという死者供養⁸⁾のための奉納額の中でも、地域の特色のある絵馬である。

上山馬野山久昌寺はムカサリ絵馬が多く奉納されていることで知られている。ムカサリ絵馬の研究は最近盛んになっているものの、明治期以降に制作されたものが多く、酸性紙などの影響から近世以前の絵馬に比べて損傷は著しい。

これまでの調査研究などから、損傷の拡大を防ぐ上で、

- * 裏面の塵埃と汚れの除去
- * 額縁のクリーニング
- * 損傷部の補修

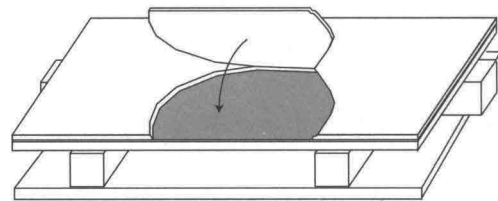
の3点が応急処置として有効とみられる処置で、この範囲で維持できないものについては解体して肌裏紙を交換する

本格修理を行うという選択肢がある。

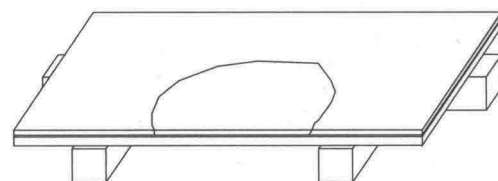
しかし、総数が多すぎることから、全ての絵馬を本格修理することが困難なことはよくある。これまでも応急処置について先述した三点についての報告を行ってきたが、損傷部への処置については詳細な報告は行っていない。応急処置の三点の内、上記二点は絵馬調査を行う人物であれば、実施できると考え、損傷部の補修は専門家の領分であると考えていた。実際に、損傷に応じて、様々な状態に配慮しながら行うため、修復家に判断を委ねることが前提である。しかし、これまでの応急処置を整理すると、損傷の程度により、部分的な補修方法についても、難易度ごとに分類できると考えた。【図10～23】は損傷部の断面構造を部分的に見た場合の模式図となっている。損傷の程度は、損傷面積の大きさに加えて、組子の枠に重層構造に接着された下張り紙の内部にどの程度損傷が及んでいるかで、必要となる処置が異なる。

これまでも地元の人の手により行われた処置例をみることは多かったが、表面の保護に和紙が貼られているものが多く見られた。多くの作品が専門家の手により修復されることが望ましいことは勿論だが、実際には身近に修復されるケースは続くとみられる。

そこで、内部構造への損傷の影響ごとに、応急処置について記すことで、今後の応急処置の実践について有効な判断を下す要素となればと考えている。



【図10】 処置事例 001



【図11】 処置事例 002

1) 部分的接着

処置の状態としては、本紙の一部が捲れたり、端部で剥がれているといったごく軽微な場合を対象としている。

下張紙が安定している場合は、下張りを糊代とし、接着剤(メチルセルロース3%水溶液)を塗布して接着させた[図10]。

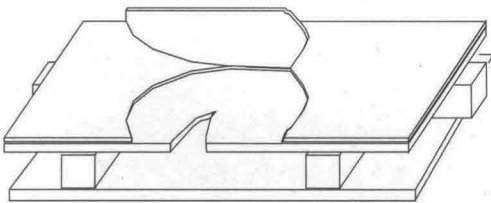
2) 損傷内部の補強と接着

突傷や、虫損、ネズミによる食害など、損傷が下張紙に及んでいることは多い。下張紙の損傷が最下層まで至っていないければ、1)のように、糊を塗布して接着することができる。しかし、下張紙まで損傷している場合は、本紙の接着の前に補強が必要となる。

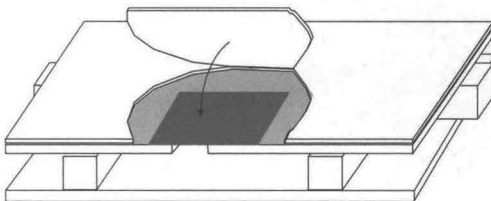
下張紙への処置によって、3通りの方法に分類した。

① 比較的軽微な損傷

[図12、13]で示したのは、下張紙の損傷が損傷部全体よりも小さい場合の処置である。本紙をめくり、損傷部に補紙を行い穴を塞ぐことで土台として安定させた上に接着した。この処置は、重ねて立てかけてある絵馬などで、絵馬の裏面に飛び出た釘が刺さることなどにより損傷した箇所を実施した。[図14]



[図12] 処置事例 003



[図13] 処置事例 004

② 厚紙によるブリッジによる補修

本紙の損傷部で多く見られた事例は、本紙と同様に下張紙も損傷している場合であった。下張紙の損傷が進んでいる場合には、欠失して本紙を支える土台が消失していることもある[図15]。そういった事例では内部の下張紙と本紙との隙間や、組子の部材を利用して構造を強化する[図16]。組子の間隔に届く長さの厚紙を指し込み内部まで指し込んだ後、引き戻すように反対側にも指しこむことで、組子を土台として厚紙のブリッジを掛ける[図17]。そのブリッジを土台として、下張紙を補強したり、本紙を接着する土台とする。本紙が欠失している場合も多いが、その場合は補紙を貼った[図18、19]。

対象としたムカサリ絵馬を始め、新聞紙を下張紙としている絵馬では、下張紙の損傷が進み、劣化により内部が損失している場合もあるため、このような補強も有効であった[図20]。

③ 裏面からの補強

下張紙の劣化や、画面側から処置を行うのが困難な場合、裏面の裏張りを一部切除して応急処置を行った。裏面の損傷が著しいことも多く、その場合は処置を行いやすいが、裏面に損傷が見られない場合は勧めることはできない。

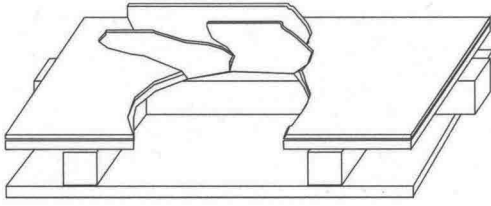
裏張りを一時的に除去し、内部に楮紙を用いて下張りを作成し、本紙を接着させた。裏面についても、再度接着するなどして収めた[図21、22、23、24]。

3) 下張りと裏張りの補強

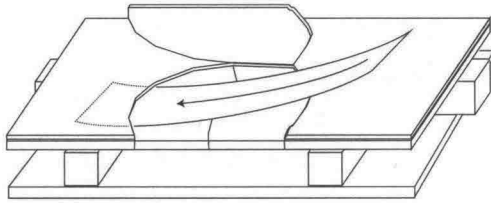
裏打紙からの剥離が全面に及んでいるものは部分的な処置での対応は困難であった。また、実際に部分的な処置で済ませるといっても必要とされる繊細さは裏打ちを行う場合と変わらないか、場合によってはかえって大変な場合もある。



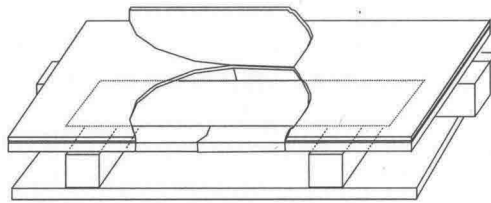
[図14] 処置事例 005



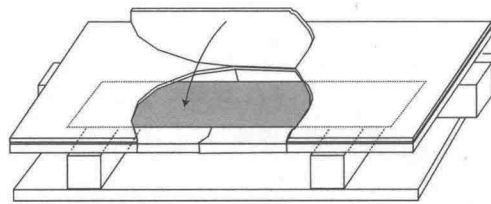
[図15] 処置事例 006



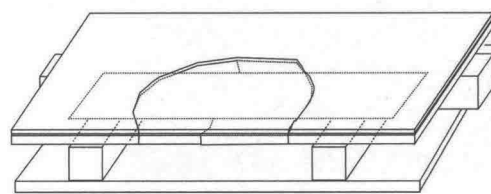
[図16] 処置事例 007



[図17] 処置事例 008



[図18] 処置事例 009



[図19] 処置事例 010

そこで、あまりにも損傷が全体におよんでいるものについては、やはり解体して裏打ちによる処置を行うこととした。しかし、今回の裏打ちも応急処置として考え、表面の汚れなど除去した後、本紙裏面の肌裏紙は残したまま裏打ちを行った。本紙を下張りから剥がすことで、内部の下張りが露出され、そちらの処置を行うことも可能になる。しかし、下張構造を全て新調することは労力も多く必要となる。また、新聞紙などの近代資料がどのような意味を今後持つのかを考えると、全てを除去することも避けたい。そこで、本紙を解体したパネルを補強する方法として、原料処理には機械漉きの楮紙でパネルをくるむように貼り補強する処置を行った。内部に残った下張りは可能な限りそのままにし、その上に本紙を貼り直した。

裏張りの補強については膏薬張りという四角く切った和紙を張っている。墨書など、文字が描かれている場合は典具帖紙という極薄の楮紙を表面に貼って補強した。

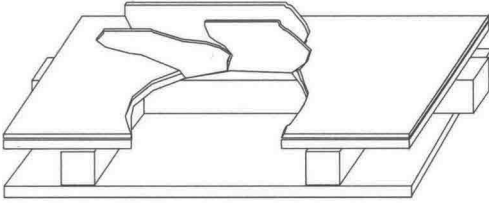
裏張りは塵埃が堆積しやすく、損傷が進む要因ともなりやすい。そのため、実際に長期間奉納される空間では紙が貼ってあるだけでも効果は大きい。実際に、調査において、裏面に紙が貼られた絵馬もあった。

5. まとめ

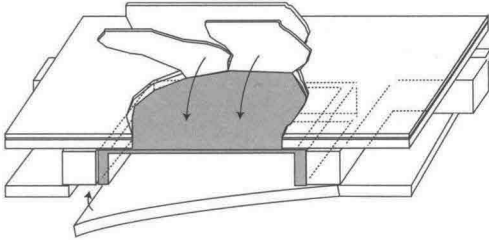
絵馬調査は盛んに行われ、報告書も刊行されている。しかし時には、対象が江戸時代以前の絵馬に限られることもみられる。しかし、供養額などの奉納事例として「ムカサリ絵馬」などの特徴的な絵馬が見られる村山地方にとっては、近代以降の紙本絵馬の保存は地域の文化遺産を保護するという点からみても今後重要な課題となるとみられる。



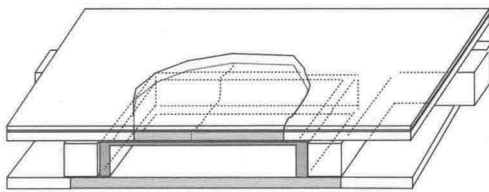
[図20] 処置事例 011



[図21] 処置事例 012



[図22] 処置事例 013



[図23] 処置事例 014

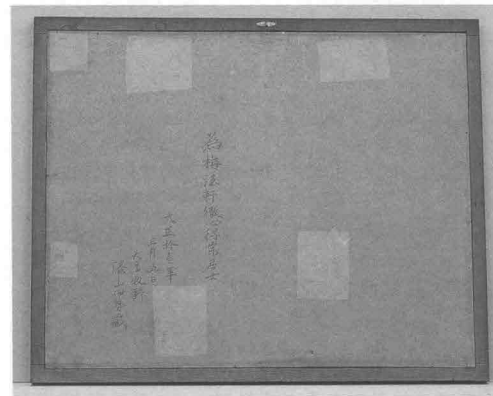


[図24] 処置事例 015

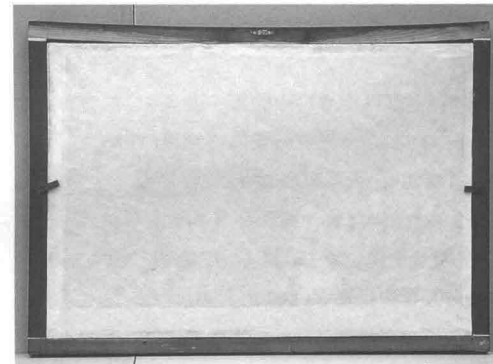
しかし、文化財行政などの保護が回ってくることは難しいかもしれない、所蔵者や地区など、手の届く範囲の保存する努力が頼みとなるようである。そのため、裏面の清掃や応急処置は保存する上で重要となる。実際の処置については作品や損傷によって異なるため、分類も暫定的であり、記載す



[図25] 裏張りの補強



[図26] 典具帖による補強



[図27] 下張りと裏張りの補強

ることの有効性についても不正確な先入観を与える危険をはらんでいる。本格修理を修復処置の本筋としてみると、今回の応急的処置は一時的な作品保管を前提としている。

これまでの調査の中で絵馬の奉納された空間では各絵馬の状態だけでなく、全体の空間が与える印象が重要であるとみられ、応急処置により、奉納空間が維持されることから、個々の作品保護へとつながることを願っている。

とはいえ大量の絵馬が修復されるためには評価の向上

が不可欠で、それまでに作品が損失する危険は大きいことを考えると、作品維持としては応急処置は有効な手段であると考えている。今回の処置は部分的な処置については解体する必要がないため、絵馬を調査し取り扱ったことのある人ならある程度は行うことができる処置かもしれない。実際の処置方法にはまだ改善の余地は多いが、作品調査と共に裏面と額縁の清掃活動を行うだけでも作品環境の改善は図ることができる。

これまで作品調査と共に清掃を行うことや損傷を改善するような試みは積極的には行われてこなかったことを考えると、今後、地域所在の絵馬調査と共に応急的処置を通じた作品環境の改善を図り、少しでも地域における絵馬の評価向上に繋がれば幸いである。

註

1. 岩井宏美「絵馬」法政大学出版、1980
2. 坂本雅美『紙の寿命』「マテリアル学会誌 no.14」p.18-21、2002
3. 大山龍顕「寒河江慈恩寺本堂の絵馬調査と応急処置」『東北芸術大学紀要 第21号』東北芸術工科大学、2014
4. 大山龍顕「上市市久昌寺所蔵「ムカサリ絵馬」の応急処置」『年報2013』p.12-p14、東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター、2012
5. 金山耕三「寒河江・西村山地区の絵馬一獅子ヶ口諏訪神社を中心に」、p32-p44、山形県立博物館研究報、1985
6. 『大江町史 近現代編』大江町教育委員会、1984
7. 『西川町史 下巻』西川町教育委員会、1995
8. 小田島建巳「死者を描いた「絵馬」の可能性」『村山民俗』no.25、p36-p40、村山民俗学、2011

[執筆者]

大山 龍顕

Tatsuaki OYAMA

文化財保存研究センター

Institute for Conservation of Cultural Property

専任講師／研究員

Lecturer／Resercher